

《第489回（2022年3月10日）子どもの本の読書会記録》 参加者：8人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『秋』 かこ さとし／文・絵 講談社

日本でもっとも有名な絵本作家の一人、かこさとしさん。2018年に亡くなるまで、絵本や紙芝居、科学の本を600作品以上も世の中に送り出しました。『からすのパンやさん』や『どろぼうがっこう』、『だるまちゃん』シリーズなど、こども時代に楽しく読んだ方も多いのではないかと思います。

今回取り上げたのは、かこさんの没後出版された絵本、『秋』。作品のあとがきによると、この本は元々、1953年から1957年に紙芝居として制作されたものだそうです。その後絵本として出版しようとするも叶わず、作品は埋もれていましたが、2020年のステイホームの期間に発見され、今回の出版に至ったという経緯があるそうです。

表紙をよく見ると、よく澄んだ秋空の風景の中に、燃えながら落下する飛行機と、人影が見えます。この本の内容は、かこさん自身の、太平洋戦争での体験がもとになっています。罪のない人たちが次々と亡くなっていく戦争の悲惨さや、平和を祈る思いが、昨今の世界情勢とも相まって切実に伝わってきます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●かこさんの作品をこの読書会で取り上げたのは初めて。表紙は、飛行機に気付かなければ、秋らしい風景。ラフな鉛筆画の上にクレヨンで描かれていて、印象的。ロシアとウクライナの戦争と重ねて読んでしまった。どうして戦争をしてしまうんだろう？最初、出版がかなわなかったのには、何か事情があったのだろうか。

●戦争の話とは思わず読んだので、意外だった。戦争は、夏のイメージはあったが秋のイメージはなかった。日常生活に落ちる戦争の影が、どんどん濃くなっていく。戦争中、兵士の死は美化される。けれど兵士も一般の人たちと変わらない生活をしてた人。普通の生活を、最後まで送れるような、平和な世界がいい。

●終戦から3年後に生まれたので、当時は周りにまだ戦争の色が残っていた。戦争時は、情報統制も行われる。こどもたちには、物事の本意を見抜ける力を持ってほ

しい。この本は、いきなり戦争のことを書くのではなく、普遍的な秋のよさから入っていくので、今のこどもでもスムーズに入っていけると思う。

●先月この本を読んだ時と、今月読んだ時では、感想がちがう。先月は、戦時中も続く日常の貴重さを感じたが、今読むと、ウクライナの状況とリンクして読めてしまう。1日でも早く平和な風景が訪れてほしい。この本のように、静かなトーンで平和の大切さについて声を上げ続けていくことが大事だと思う。

●今だからこそ、この本を読む価値があったと思う。教師時代、1学期の終わりに、こどもたちに戦争や平和についての本を読み聞かせした。今は、本の文化は縮小してしまっていて、動画など真新しいものが出てきているが、やはり本には力がある。本だからこそ伝えられるもの、残していけるものがある。

●自分がこどもの頃は、先生が戦争について話してくれたり、マンガを通して戦争に触れる機会があった。導入では、秋の美しい風景が描かれ、楽しいイメージがあったが、だんだん戦争の話になっていく。戦争は、普通の人の日常の中で起こっていたんだと感じる。今読んだから、余計に響くものがある。

●かこさとしの作品は、明るくて楽しいイメージだったので、戦争がテーマの絵本が没後出版されたことは意外。戦争経験者の言葉は、人の心を動かす。先月にこの本を読んだ時には、作者が経験した太平洋戦争のことが浮かんできたが、今月はウクライナのことしか浮かんでこない。

次回 4月14日(木) 10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『クララとお日さま』カズオ・イシグロ／著、土屋 政雄／訳 早川書房
申込み・参加費不要。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更・中止となる場合があります。変更・中止については、オーテピアのウェブ・サイトにてお知らせします。